

Title	「天王寺少人の記」の周辺：来世にたくした恋心
Author(s)	岩井, 茂樹
Citation	日文研叢書. 2005, 34, p. 141-147
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23359
rights	Copyright ©2005 by the International Research Center for Japanese Studies
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

七 「天王寺少人の記」の周辺

—— 来世にたくした恋心

青木淳氏による一連の研究「東寿院阿弥陀如来像内納入品資料」中には、いくつかの興味深い資料が存在する。¹⁾ それぞれの資料については、本編の青木氏による解題に詳しいが、その中でもとりわけ興味をひくのが、「天王寺少人の記」と名付けられた一文である。

本稿は、「天王寺少人の記」の内容紹介と、これがどのような思いをこめて書かれたものなのか、を明らかにしようと試みたものである。

稚児に関する描写

まずは、資料の記述内容を簡単に見てゆきたい。この記述は、その内容から三段に別けることができる。

第一段は、「少人：さくらいろなり」。第二段は、「しろ・きこしにさしたり」の部分。第三段は、「さりたうの：すかたなり」である。第一段では、「少人」の天王寺でのありさまが書かれている。「少人」とは、少年、つまり稚児のことである（以下稚児とする）。その稚児の年は十五、顔は丸みを帯び、愛々しく桜色をしているという。

第二段は、稚児のまもっている衣裳に関する記述である。白い小袖を着て、生絹織の大口袴には「洲流し」（絹地に金、銀の砂子を置き散らして、洲を流れる水の様子をかたどった模様）をあらわしている。そして「ゑこは」の直垂と、小袴をつけている。それらには、白い生絹の裏地がついており、白い糸の結紐と菊綴がなされている。丹漆に箔をほどこした空色の扇（扇面には月が描かれていたか）を持ち、笛を腰にさしていた、という。

第三段は、記述者の印象にのこった稚児の行動について描写した部分である。舍利堂の内の開き戸のある部屋で、稚児が誦文する姿が描かれている。この第三段は解説不明な部分が多く、細かな意味は把握しがたい。だが、解説不明な部分が多いにもかかわらず、稚児のうるわしい姿がはっきりと想像できる部分である（図1参照）。

稚児は何者か

次に、記述内容から推測される稚児像について述べてみたい。



図1 公家童子（井筒雅風「原色の本服飾史」光琳出版）

天王寺はいうまでもなく、四天王寺のことであるから、この稚児が四天王寺にいた稚児であることがわかる。天王寺は、御所の大内楽所（京都楽所ともいう）、興福寺・春日大社・東大寺などの南都楽所（奈良）と並ぶ三方楽所の一つである。天王寺楽所に関しては、『徒然草』第二百二十段に、次のような記述がある。

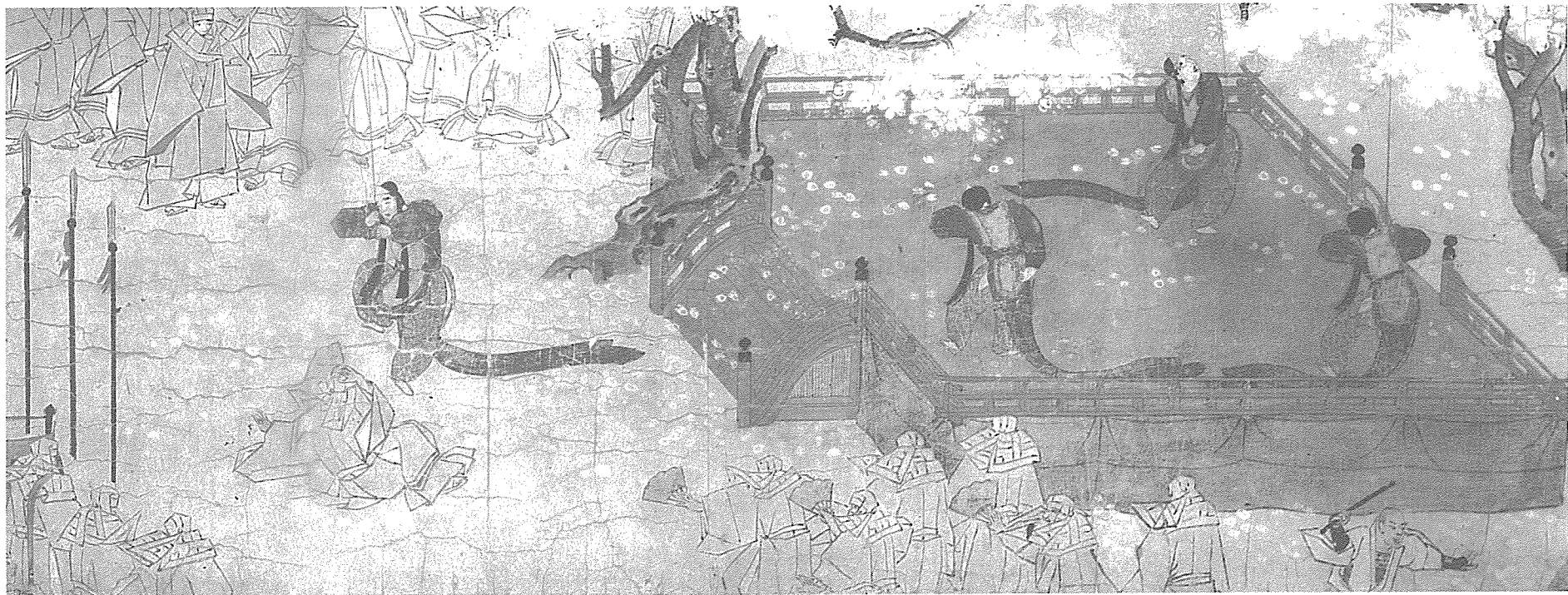


図2 醍醐寺桜会の童舞 (天狗草子東寺巻『統日本絵巻大成』19 中央公論社より)

「何事も辺土は賤しくかたくななれども、天王寺の舞樂のみ都に恥ぢず」といへば、天王寺の伶人の申し侍りしは、「当寺の樂は、よく鬘を調べあはせて、物の音のめでたくとのほり侍る事、外よりもすぐれたり。故は、太子の御時の鬘、今に侍るをはかせとす。いはゆる六時堂の前の鐘なり。その声、黄鐘調のものなかり。寒暑に随ひて上り下りあるべき故に、二月涅槃會より聖靈會めでの中間を指南とす。秘藏の事なり。この一調子をもちて、いづれの声をもとのへ侍るなり」と申しき。

この記述から、天王寺樂所の演奏のレベルが都に劣らないほど高く、また樂所側もその演奏に強い自信をもっていることがうかがわれよう。天王寺は、童舞(図2参照)の舞手、あるいは樂人として多くの稚児を抱えていたと思われる。

稚児の年は十五歳。伊藤清郎氏や吉田靖男氏によると、寺社に所属した稚児は、十五歳で得度(出家)、二十歳で受戒するのが原則である⁶⁾という。原則に従うならば、得度、つまりは剃髪していてもいはずであるが、この稚児はそれをしていないようである。実際、十五歳で得度、二十歳で受戒という原則は、中世には厳しく守られてはいなかったようで、十五歳を過ぎて、剃髪しない稚児がたくさんいたようである。この稚児も、そのような稚児の一人であったの

であろう。稚児の髪型は通常垂髪であるが、ここには、髪の毛の美しさに対する描写はなく、顔の形状と色の説明にとどまっている。

第二段の部分は、装束についての描写であった。この稚児は、白い小袖の上に大口袴をはき、直垂と小袴をつけていた。絵巻物などの分析から、稚児は通常、水干姿をしていることが明らかになっているので、この稚児も水干を着た格好をしていたと考えてよいだろう。

これには、次の記述が参考になるかもしれない。応永三年（一三九六）成立の『法体装束抄』の記事である。この書は、高倉永行（？一四一六）という公卿によって書かれたものである。次の記述は、「童体装束事」中「水干之事」の一節である。

又単ぐみとて水干のひほにするくみあり。袴も上におなじ色なり。ぬいやうはひた、れのはかまに同じ。こしまたも白すゞしなり。練生いづれもしさいなし。但単水干よりく、りの時はかならずすゞしたるべし。

菊閉も色々の糸なり。水干の色にはへあふやうにすべし。とち所。上は五所なり。又袖のうちをもとづる事あり。それは衣文にさしあひてわろき也。袴は股立ひざ四所なり。（中略）

又色ある単。水干并長絹の水干には色々の糸の菊閉。生よりく、りひほ等なり。衣をかさねず。只大口ばかりの色々の小袖など着する事しさいなし。

「天王寺少人の記」中では、「多こは」という言葉が何を指すかが不明なので、何色の直垂と小袴であったかは筆者にはわからない。だが、『法体装束抄』の記述を見る限り、色などにはあまり厳しい制限はなかったようである。それよりも、生地素材や、紐の通し方、結び方により注意が向けられている。かといって、色が重要ではないかといえは、そうは言えない。「多こは」が色名をさすのか、あるいは文様の種類をさす言葉なのかは、今後の課題としておきたい。ともあれ、この稚児装束に関する詳細な記述は、今後、稚児研究の貴重な一資料となるだろう。

ところで、この稚児は空色の扇を持ち、笛を腰にさしていた。扇は稚児の持物の一つである。ただし、笛は必ずしも持つていなければならぬものではないから、この稚児は童舞を舞う人ではなく、笛が達者な楽人の一人であったのではないだろうか。

第三段からは、舍利堂で読経を行なう稚児のひたむきで、あでやかな姿が目につく。どうやらこの稚児は、記述者の存在に気付いていないようである。稚児にそそがれた熱い視線のみが感じられる。

「天王寺少人の記」の内容から筆者の頭に浮んだ稚児像は、以上のようなものであった。

「天王寺少人の記」はなぜ書かれ、遺されたのか

これまでは、記述内容からそこに描写されている稚児に焦点を当ててきたが、これ以降は「天王寺少人の記」を書いた人物と、その動機について私見を述べてみたいと思う。

この記述者は、結縁者中の人物であると思われるから、男性であり、かつ僧侶、あるいはそれに准ずる人物であろうと推測される。少なくとも寺社に関係のある者であることは、まず間違いない。僧侶が美しい稚児に恋するということ、当時の物語や歌、絵巻などが数多く残されているという事実は、中世史や男色に関心のある者ならずとも、よく知っていることであろう。物語では『秋夜長物語』（南北朝時代成立）や『松帆浦物語』（永正七年（一五二〇）以前成立か）、『幻夢物語』（文明十七年（一四八五）以前成立か）、『鳥部山物語』（室町時代成立）、和歌では『檜葉和歌



図3 天王寺「聖霊会」(雅亮会『天王寺舞楽』講談社より)

(個人蔵)、などが有名である。これらについては、それぞれ先学¹⁰に研究があるので、ここではその内容には立ち入らない。だが、「天王寺少人の記」の記述内容や、先に挙げた数々の稚児に関する資料などから判断すれば、記述者は僧侶である可能性がもっとも高い。したがって、本稿ではひとまず記述者を僧侶と仮定しておくことにする。

先に述べたように、平安時代以後(特に院政期以降)、僧侶と稚児の恋物語や恋歌などが大量にこのされるようになる。この時期、いわゆる「童子信仰」が高まったことは、五味文彦氏や、鎌田東二氏らの研究によって明らかである。また、この「童子信仰」興隆の背景には「末法思想」の影響が強いことが、小山聡子氏によって指摘されている。つまりは、こうである。童子は宗教界と俗世界との媒介的存在であり、神仏に近い存在であると考えられた。それゆえ、童子形の文殊菩薩、地藏菩薩、聖徳太子像、弘法大師像が作られたり、描かれたりした。小山氏はそこに、源信の『往生要集』(寛和元年(九八五)成立)による穢れ観念の形成に代表される、「末法思想」の強い影響があったことを指摘する。末法の世にあつては、自分たちは穢れた人間であり、住んでいるところは穢土、すなわち穢れた地であると認識されていた。その穢れから救ってくれる存在として、仏菩薩の使者で、穢れを厭わない童子の姿をしたものへの信仰が生まれ、そして盛んになったというのである(現在でも四天王寺では種々の童舞が行われている。図3参照)。

ともあれ、平安時代以降このような童子に対する神聖視というのが形成されたことは確かであり、「天王寺少人の記」に話を戻そう。これが書かれたのは、年号記載のある他の像内納入品から考えても、平安末期から遅くとも鎌倉前期である可能性が高い。つまり、この記を書いた人物は平安末期から鎌倉前期に生きていた人であり、さらに想像をたくましくすると、身分がそれほど高くない(権力があまりない)か、あるいは性格的にはどちらかといえばひかえめな人物であったのではないかと、筆者は考える。なぜなら、この記が恐らく来世に稚児と結ばれることを祈念して仏像内に入れられたものであると思われるからである。現世において稚児によせる思いが成就していたなら、このような文書を仏像内に入れる必要はない。身分が高かったり、あるいは積極的な僧であれば、恋歌や恋文などを贈って、現世での恋の成就を何としてもなしとげようとするはずである。だが、この記述者はちがう。彼は、現世で成就し得なかつた恋を来世で実現しようとして願っているのである。すなわちこの「天王寺少人の記」は、阿弥陀仏と結縁することを目的とするとともに、この稚児とも結縁したいという二重の結縁意識に基づいて書かれたものではない。

集』雑部・童篇(素俊撰・嘉禎三年(一二三七)成立・鎌倉前期の奈良歌壇を知る貴重な資料)、『続門葉和歌集』恋部(醍醐寺報恩院の吠若麿、嘉宝磨編・嘉元三年(一一三〇五)真名序・醍醐寺歌壇を知る貴重な資料)、『安撰和歌集』恋部(興雅撰・貞和以降応安二年(一二三六九)以前の成立・山城国真言宗安祥寺関係の僧侶、稚児の歌を多く収載)、絵巻では、『稚児之草子』(醍醐寺蔵)、『稚児観音縁起』

かろうか。阿弥陀仏に極楽へ導いて欲しいとする気持ち、そして天王寺で見てから忘れることのできなかつたうるわしい稚児との恋の成就、この二つの願いがこの「天王寺少人の記」にはこめられているのではないか、と筆者は考える。

- (1) 青木淳「仏師快慶とその信仰圏」伊藤唯真編『日本仏教の形成と展開』（法蔵館、平成十四年十月）、同「仏師快慶と天台関係の造像活動」（『日本宗教文化史研究』第七卷第二号、日本宗教文化史学会、平成十五年十一月）、などを参照されたい。
- (2) 延慶本『平家物語』には「紅ノ扇ノ月出シタル」という部分がある。これは、八嶋の合戦で那須与一が射る扇の的に書かれた絵に関するものである。つまり、延慶本では、那須与一が射た扇の的に月が描かれていた、とされているのである（覚一本系統は「日出シタル」。したがって、稚児が持っていた扇も月が描かれたものであったと思われる。
- (3) 図1は公家童子の半尻姿であり、「天王寺少人の記」の記述と同じではない。ただし当時、寺社に属する稚子には公家階級出身の者が少なくなかった。もし、この稚子が公家出身の者ならば、図1のような姿をすることもあったに違いない。
- (4) 木藤才藏校注『徒然草』（新潮日本古典集成、昭和五十二年三月、一三三二頁）から引用した。
- (5) 童舞など、稚児が関わる芸能に関しては、土屋恵氏による一連の研究が参考になると思われる。土屋恵『中世寺院の社会と芸能』（吉川弘文館、平成十三年一月）などを参照されたい。
- (6) 伊藤清郎「中世寺社にみる『童』」（『中世寺院史研究会編『中世寺院史の研究』下、法蔵館、昭和六十三年三月所収）、吉田靖男「奈良時代の得度と受戒の年齢について」（『続日本紀研究会編『続日本紀の時代』、塙書房、平成六年十二月所収）を参照されたい。
- (7) 小松茂美『日本絵巻史論』第五（『小松茂美著作集』第三十三卷、旺文社、平成十三年三月、二七八頁）、黒田日出男『増補 姿としぐさの中性史』（平凡社ライブラリー、平成十四年十月、五十八頁、六十四頁）などを参照されたい。
- (8) 塙保己一編『群書類従』第八輯（装束部・文筆部）、続群書類従完成会、昭和三十五年四月訂正第三版、三六〇～三六一頁。
- (9) 五味文彦『院政期社会の研究』（山川出版社、昭和五十九年十一月）、鎌田東二編『翁童信仰』（民衆宗教史叢書第二十七卷、雄山閣出版、平成五年五月）所収の諸論稿を参照されたい。
- (10) 小山聡子「中世前期における童子信仰の興隆と末法思想」（『佛教史学研究』第四十三卷第一号、佛教史学会、平成十二年十二月）、「末法の世における穢れとその克服―童子信仰の成立―」（今井雅晴編『中世仏教の展開とその基盤』、大蔵出版、平成十四年七月）。

（岩井 茂樹）